

この子をそだて下さること、かなしきねがひにてそろ。

二月二十六日

百合子の祖母より」

彦一はそれを小聲に読みつゞけたが、途中で幾度か鼻をつまらせて漸くそれを読み終つた。胸の中が熱くなつて、陰惨な死の匂ひが彼の周囲をとび狂ふやうにも思はれた。そして彼が涙を拭つて百合子を見た時、彼女は眼をつぶつてゐるが、頬を傳つて涙が白く光つてゐた。

四

人生がいかに苦しくあらうと、その老いたる女の手紙は、あまりに深刻であつた。彦一は深い夜の沈黙の中に、彼女の靈が手をさし伸べて百合子の傍にゐるやうに思ふと、粟立つ肌と共に手を慄はせて、その紙を取り落した。

『あゝ。』

彼はそれを拾ひ上げて、やつとのことだゝんだ。

しばらくして百合子はばかりと泣き止むと、弱いけれぎ火のやうに怨みをふくんだ聲で、彼に囁いた。

『わかつて、私の父さん……その人に、私が死んだらそれをやつてね。おばあさんはそんな手紙を書いたけど、私は行かなかつた、とも言つてね。それは私がおその人を憎んでゐるからだつて……ねさう言つて頂戴。』

彦一はうなづくより外なかつた。そして彼女に促されて、次の手紙を取り上げた。

『それは私、聴かなくつてもいゝわ。』

『あゝ。』

彼はそれに眼を走らせながら、熱い涙のにじんで來るのを止めようもなかつた。

「百合子をすくつて下さつた方へ、百合子の祖母よりねがひ上げそろ。この子は不幸ものにて、そのことはおきゝなされしか。

たゞたゞおねがひいたすは、あなたさまよりこの子をこの子の父へとおわたしなされ、よくよくあとのことのみ下されたきが死この老母のかなしきねがひにそろ。この子の父は赤坂の聯隊近くに住居する大谷武彦と申す人にて、わたくしとしてはうらみもあれぎ、そのことは申上げずとも、なさけある方には、この子よりお話いたすべきやう申しつけそろ。小き時よりてんかん申すおこりやまひこの子にありそろこと、もぐさもこの子持たせありて、それをえり下三寸にその時する申しそろ。下谷のりうかんぎうの灸にて、このことその父へも申しきかせたくそろ。

右、なにごともあなたさまなさけにすがりてたのみまゐなせそろ上は、よみぢよりきつとあなたさまのしあはせになりそろやういのり申すべく、このことくれぐれもたのみきかせ申しそろ。あらあらかしこ。

二月二十八日

百合子の祖母」

彦一が袋をあけた時、その中からこぼれ落ちたものがあつたが、彼はそれが何であるかわからなかつた。けれどその手紙を見て、それが、彼女の祖母が死の間際まで心配した彼女の持病のための薬であることが彼にはわかつた。そしてそれが孫娘のための彼女の心づくしの一つであると思ふと、彦一はそこに尊い親心を見つけたのであつた。それは人生に於ける永遠の母性愛のあらはれとして彼に感ぜられた。……母に代つて祖母が、そこにそれを示してゐた。

彼が眼を上げた時百合子が囁いた。

『おばあさんはあなたにたのんで、私を父さんのところへやるつもりでゐたのよ。けれど私、さうしなかつたわ。』

『それで、この手紙も見せなかつたんだね。』

『ええ。』

彦一はその時心に決心すると、やさしく彼女をながめて、靜かに彼の耳許に囁いた。

『私は、お前の父さんを知つてゐるよ。』

『え。』

彼女はその青白い腫の中に、恐怖を浮べてぢつと彼を見まもつた。彦一はそれを見ながら、やさしくつゞけた。

『ねえ、お前は父さんに逢ひたくないのかい。許す許さないはとにかくとして、その人に逢ひたくはないのか。』

『それは私だつて……』

百合子の腫が急に熱して來た。

『私だつて逢ひたいわ。けれど逢つたつて、逢つたつて、だめなの……だつて私、その人を憎んでゐるからよ。』

『あゝ。』

彦一は呻いて、長い沈黙に落ちた。彼はそれから、百合子の溢れ出た涙を拭いてやりながら、片手に彼女の手をとつて握つた。

『けれど、もしその人が、お前にほんとに親切な心を持つてゐて、お前に逢ひたがつて泣いてゐたらどうするね。』

『うそだわ。』

彼女は唇を噛みしめた。

『そんなことありやしないわ。』

『いゝえ、あるんだよ。ねえ、悲しがないで聴くんだよ。その人はお前の母さんのためにも親切にしたんだよ。そしてその母さん……ねえ、しつかりして聴いておくれ、お前の母さんも可哀想に亡くなつたんだよ。』

『亡くなつたの……』

彼女はあてもなく遠くを眺めるやうに瞳を空に投げておし黙つた。それから涙をたゞへた瞳を彼にうつした。

『しかたがないわ……それはいつだつたの。』

『六月の初めだつたんだよ。』

『あなたの病氣の時ね。』

百合子は長い間ちつと眼をふせてゐた。それから悲しげに呟いた。

『可哀想な母さん！』

彦一も耐へ切れなくて涙の沈黙に落ちてしまつた。彼には百合子がわつと聲を上げて泣き出したいのを耐へてゐるのがわかつてゐた。彼はたゞちつと眼をふせて、寂しい木枯の吹き出す音に耳を傾けた。

五

しばらくして百合子が言つた。

『話して頂戴！ その人のことを……』

彦一はやはらかに話しつゞけた。

『その人はお前のお母さんがなくなつたのを聞くと、すぐに駈けつけて行つて。親切にそれを葬つてくれた。そしてその前からずつとお前を探してゐて、やつと探しあてゝ、する分逢ひたがつてゐるのだよ。ねえ、もしその人がお前のために、一生懸命にしてゐたら、お前はその人を許して上げるかね。考へてごらん。お前にもその人がわかる筈なんだよ。』

『では……』

百合子は思ひ沈んだ。

『やつぱりあの人が私の父さんだつたの、大谷……さうだわね。私、いつかもそんなこと考へたわ、』

あなたの父さんが金貸とわかつた時だわ。』

彼女が平靜なのを見て彦一は安心したが、何かその瞳の中に狂暴な色の浮んで来たのを彼は見てこつて尋ねた。

『お前、怒つてるのかい。』

『いゝえ。』

彼女はむつとして答へた。

『お前、ねえ。』

彦一はそれに哀訴するやうな眼を向けた。

『父さんを許してやつておくれ……あの人も苦しんでるのだよ。』

彼女は輕蔑したやうに、長い間彼をまじまじと見つめた。それからぐるりと寐返りをうつて呟いた。

『いやよ、私……私……あの人が父さんなら、それを憎んでやるわ。でもね、でもね、おぢいさんの方だけ好きになつてやるの。』

『え、それはどういふ譯だい。』

『わかつてるわ。』

彼女は悲しさに嘔いた。

『私、私の分だけ、あの人を許すの。けれど、おばあさんの分は許さなくて憎んでやるの。』

彼女は泣き出した。

『でも、でも、私……それを聞かない方がよかつたわ。聞かなくて、さうかも知れないつて……さう思つてた方がよかつたわ。だつて、だつて、あなたが、ほんとの兄さんになつてしまつたの。』

その奇妙な言葉が、彦一はわからなくて尋ねた。

『どうしてそんな、そんなことを言ふんだい、わからないよ。』

彼女は、またぐるりと彼の方を向いて、蒼い大きな瞳で彼を見つめた。それから彼女は美しくほとと根くなつた。

『私、兄さんなんて要らないわ。』

『え。』

『私……あなたを愛してるわ。兄さんなんかいやだわ。あゝ、でもだめなのねえ。もうほんとの兄さんになつてしまつたわねえ、あゝ、私……私を抱いて……』

彼女は伸び上つた。そしてあわてゝ彼女を押へた彦一の頸に、細い手を巻きつけた。

『生れ變つて来るわ。生れ變つて来るわ。そしたら愛して頂戴ね、ね、ね。』

彼女は彦一の唇に自分の熱い頬をおしつけて、それから手を放すと、すぐにつぶしてしまつた。さうしてその時、武彦老人がベットからとび下りて來た。

彦一は、その父が前から眼をさましてゐたのを知つてゐた。そしてその父は、それまでちつと耐へて、耳をすましてゐたのだつた。けれどその父は、彼女のいちらしさに耐へ切れなくて、とび起きてしまつたのだつた。

『百合子。』

その父はおづおづとその手を取らうとしたが、彼女は冷い眼をそれに浴おびせた。その父は絶望したやうに呻いた。

『百合子、許してくれ。俺はお前の父さんだつた。許してくれ。』

百合子は彦一に助けられて仰のけになると、すぐ呟いた。

『可哀想な父さん。』

『百合子、許してくれ、俺がわるかつた。みんな俺がわるかつたのだ。』

『わかつてよ。』

百合子の聲は小かつた。それから大粒の涙が彼女の瞳からころび出た。切ない息が三つの胸からつゞいて出た。彼はやるせなく呟いて、眼をつぶつた。

『私、私、誰でも許すわ。世界中を許すわ。』

『お。』

老人の手と彼女の手を組み合わせられた。彼女はすぐ、さびしげにほゝゑんだ。

『そして私、死んでから父さんの代りに……おばあさんや母さんにお詫するわ。憎めなかつた。誰も憎めなかつた。だから許してしまつたつて……』

三つの魂が、そこに啜り泣いてゐた。不幸な父、不幸な兄、不幸な妹……その父は聲をあけて彼女の頬に濡れた頬をおしつけた。長い間……そこに風の音ばかりが聞えた。彦一は、はり裂けさうな胸を抱いて、いつまでも泣いてゐた。

ふと彼の上げた眼に、百合子が變に瞳をつり上げたのが映つた。

『發作だ。』

彼は卓に駆けよつて薬をかきさがしたが、あわてゝ倒した瓶の間から、彼が夫人から託たくまれて來た毬がころけ落ちて、ころころところがつた。彼はしかし、それを拾ひ上げるどころではなく、すぐ彼女に匂ひ薬をかきせて、それから口うつしに薬を吞ませた。

その父はおろおろと叫んだ。

『百合子や、百合子や……』

しばらくして彼女は囁いた。

『もういゝの、もういゝの。』

彼女はつぶつた眼をひらいた。それから彦一が氣がついて拾ひ上げた毬をぶらんとさげてるのを見ると、弱々しげに囁いた。

『奥さんがよこしたのね。』

『あゝ、さうだよ。』

『それ上げるわ。あけて、あけて。』

『え。』

『あけて、あけて。』

彼女はそれだけ呟くと、また眼をつぶつた。

烈しい発作がまた起つて、彼女は唇を噛みしめた。

『彦一。』

その父は叫んだ。

『早く、早く、醫局へ。』

彦一は、その毬を、袂に入れたまゝ駈け出して、隣の部屋からとび出て來た看護婦と、つきあた

らうとして、そのまゝ駈けて行つた。混亂した彼の胸の中で、泣きわめきたいやうな、悲しいものがさわいでゐた。

六

晩秋の靜な夜明けであつた。朝の光がさして來る時分、百合子の病室に、その父や兄の彦一の外、青木ドクトル、夫人、光子なども、曇つた瞳を見交して立つてゐた。昏睡をつゞけてゐる百合子の腕を握つてゐるのは、その兄の親友の勝山であつた。

ふじ、それは奇蹟でもあるやうに、瀕死の百合子に意識が歸つて來た。

『おゝ。』

その父が進み寄つた。

『わかるかい、父さんだよ、父さんだよ。』

百合子はかすかに頷いて、その唇を慄はせたが、聲は湧いて來なかつた。彦一が、そこに進み出た。

『百合子。』

彼は、なにも言ふことが出来なかつた。彼女の瞳が、それに吸ひつけられたやうに止ると、苦しげな吐息と共に聲が洩れた。

『ルビ……芙美子さんと一しよに。』

『え。』

彦一は、それをはつきりと聴いた。

彼女の大きな瞳から一つ、涙がころけ出した。それから彼女は、美しく満足したやうにほゝろみを浮べて、それに頷いた彦一を見つめた。彦一は、彼女の言はうとしてゐることがわかつた。それは芙美子を彼に結びつけようとする彼女の最後の願ひであり、祝福であるに相違なかつた。

ルビ……その言葉は謎であつた。

二時間ほどの後、それから眠りつゞけた百合子は、そのまま永遠に眼をつぶつてしまつた。魂は消え果てた朝の星を追つて、輝く太陽をめざして空高くとんで行つたであらう、が彦一はその顔に彼にあたへられたほゝろみのまだ消えないのを見た。不幸な少女！それが残してくれたのは人生の門出にはなむけてくれた微笑！彼は涙の中に、やはらかな彼女の心を感じた。

死！それは悲しい。しかし貧しく不幸であつた彼女、少しづつ狂して行く彼女に取つて、死はまた救ひではなかつたか。さうして彼女は、そこに清らかに美しく咲いた花のやうにほろりと散つ

た。しかも彼女の残したものは、父ミ子の和解、愛の正しい道の指示、それらを伴つてゐる美しい感情であつた。そこには、涙と共に輝いてゐる光があつた。

誰も泣いてゐた。しかし嘆き悼みながら彼等は嚴かな神の啓示にうたれてゐた。

高貴な終りを見つけた人間のめぐりには、

天使がなくとも神がある。

かき曇つた彦一の心に、エマーソンのその詩の一章が浮んだ。不幸に死んで行つたこの少女のため、誰もそこにある啓示の下されたことを感じてゐたとしても、その言葉をその魂に捧げるものは、兄であり、また彼女に取つての清らかな愛人であつた彦一より外にあり得なかつた。そして彼は、それをはつきり自分信じたのであつた。

光子が涙の瞳を上げてやさしく言つた。

『なんて神々しく笑つてゐるのでせう！大谷さんになにか言つた時から、これはつゞいてゐましたわ。』

『安心したんですね。』

勝山がそれに涙ぐんで應じた。

けれどその父の武彦老人は、その小さい手をしっかりと握つたまゝ、放さうとしなかつた。あきら

め切れない執着が老人を泣かせながら咬かせた。

『あゝ、あきらめ切れない。あゝ！』

『いゝえ、父さん。』

彦一は、それを死の少女の魂に代つて父に囁いた。

『執着してはなりませんよ。こんなに清らかに死んで行つた、彼女の魂を、また泣かせないでください。彼女は、この生でなすべきことを、ちゃんとして逝きました。ねえ、父さん、彼女は笑つて行つたのです。泣いて行きはしませんでした。』

『わかつたよ、彦一……』

老人は百合子の手に慄へる唇をあてゝ、そつとそれをおいた。そしてよろよろとして彦一の肩に縋つた。

『これから俺はお前一人がたよりだ。俺を孤獨にしないでくれ。』

美しく痩せた青木夫人が進んだ。

『あゝ、不幸な子！』

それは百合子の不幸な生涯を悼んでゐるやうなひびきであつた。夫人の白い手は見えない糸にながれてゐるやうに、その小さい手と重つて慄へた。彦一は、そこに夫人が小さい不幸な子として百合

子を可愛がつてくれたことを想ひ出してゐた。母のない小さい少女が、母のやうにその手に縋つてゐたことを思ふと、夫人も彼女にとつて、この生の忘れられない人であるに相違ないと思はれた。

その時彦一の母が彼に囁いた。

『私は、私は、彼女に代つてやりたい！』

『母さん。』

彼がその母をたしなめるやうに慰めた。

『これから寂しくとも幸福になるんです。そんなことを言はないでください。』

(彦一は、かなり経つてからこんなことを思つたことがある。「不幸な人は、それ自ら不幸を樂んでゐる。不幸だからこそ、その中に希望を見出し得ることもあるのだ。」)

またすつと後のことであるが、染井の墓地の片ほとりに、風に吹かれ、雨にさらされてゐる一基の墓が見られたが、その碑面には、かう彫まれてゐた。

不幸なるがまゝに、

彼女達に、永遠よ光あれ。

それは時代に名をなした文學者大谷彦一によつて書かれた百合子、その母、その祖母、その三つの魂への彼の驢の言葉であつた。「あるがまゝに生きよ。」それを信じ、人生に對しては、どこまで

も高く、そこから伸びて行くことを求めることを、後の彦一は感じてゐた。

七

百合子を葬つたその翌日、彦一は墓參の歸りを光子にすゝめられて、勝山と青木の家に寄ることになつた。彼は光子がちらつと勝山に目配せしてゐるのを見て、彼女がなにかの目論見もくろみをしてゐることがわかつたけき黙つてゐた。そして家に歸るその父や母と別れて、晩秋の日ざしにうたれながら、うなだれて歩いてゐた。

先に立つた勝山が光子に囁くのを彼は聞いた。

『彼女あのひとほんとに來ますか。』

『大丈夫ですわ。そんな心配しなくつたつて……』

勝山が彼をふりかへつた。

『大谷、悲しみの後よりよろこび來るといふことがあるよ。ねえ、藤村の「並木」にかういふ言葉があるだらう。うなだれて歸る腰辨達に叫びかける、「もつと首をあげてあるけ。」とか言つたのさ。僕は君に、それをやりたいね。』

『わかつたよ。』

彦一は顔を上げて答へた。

『僕だつて、明るいことを考へてゐたんだが、ふつとルビーのことが胸につかへてね。』

『ルビー。』

光子が眉をひそめた。

『またその心配なのね。』

しかし彼等は黙々として、それから各自に考へながら歩いて行つた。

青木の家に着くと、先に俥で歸つた夫人が出迎へて離れに案内してくれた。彦一は屈託して忘れてしまつてゐたが、そこに悄然と坐つてゐる芙美子を見つけてはつとして立ち竦んでしまつた。

『驚いたでしょ。』

夫人が美しくほゝゑんだ。

『私が、こんな綺麗な人形をお隣からお借りして來たの。大谷さん、今日はゆつくりしていらつしやう。』

『ええ。』

夫人は父の借着的紋附でかしまつた彦一を見つめて笑つた。

『着物を更へるといゝわ。』

彼は病院の方でその着物を更へたので、平常着が、そのままそこに預けられてあつた。夫人は女中を呼んで、それを持って来るやうに言ひつけた。

芙美子が赧くなつたまゝ、もぢもぢと彦一を見た。

『この度は百合子さんが……大變でしたわねえ。私、上りたかつたのですけど。』
『ありがたう。』

二人はそのまま黙つてしまつた。越えられない溝がそこにあつて彦一を苦しめてゐた。彼の胸にルビーのことが、またしても想ひ出された。そしてそれがありさへすれば、その溝も易々と越えられさうな氣がして、寂しくうなだれるより外なかつた。

夫人は自分がるるので二人が恥しく思つてゐるのであらう、と思つたらしく立ち上つた。

『ちよつと失禮ね。』

夫人はそこを駈け出して行つた。

勝山と光子は、まだ應接室の方でなにか話合つてゐるらしく、そこに來なかつた。そして二人はそこに遠く離れて坐つたまゝ、取り残された。

彦一の眩しいやうな眼に映つた芙美子が、そのくらゐ美しく見えたことはなかつた。彼女は白粉

もつけず、粗末な平常着のまゝで、髪なごも亂れてゐるが、なにかの希望がその頬を赧らめさせ、それに酔つて夢を見てゐるやうに思はれた。

『大谷さん。』

突然芙美子が涙ぐましい瞳を上げた。

『私、光子さんからみんな伺ひましたの。ほんとに、なんといふことだつたのでせう、私、驚くよりか、恐しくなりましたわ。そしてやつぱり……』

彼女はやさしく彼を見つめた。

『私は、私は。』

ばあつと輝くやうに彼女は耳許までも赧くして俯いた。

『私はあなたに逢ひたかつたんですの。』

『芙美子さん。』

彦一は膝を進めた。

『あなたはほんとに私を、私の今までを許してくださいでせうか。』

『えゝ。』

彼女の聲は細かつた。

『私、なんにも思つてはるませんわ。』
『ありがたう。』

彦一のかつと熱したやうな耳に、彼女の聲がまたひどい。

『私が弱かつたのですわ。それがわるかつたのですわ。』

彦一は眼が眩んで、自分がその幸福の中へよろけ込むやうに感じた。そして急いで手をふるこ叫んだ。

『あなたがわるいことなんてあるものですか、みんなルビーのためです。ルビーの……』

はつとして芙美子が蒼ざめるのが見えた。さうして彼も自分の言葉にぐつとつきのめされて、うめいた。

『あゝ。』

その時廊下をしとやかに、女中が両手に捧げるやうにして彦一の着物を持つて来て、そこに膝をついた。

『お召物を持つてまゐりました。』

『すみません。』

『こちらにおいてまゐりますから。』

『えゝ。』

女中はそれを障子の際において立ち去つた。彼はそれを見送つて、庭を眺めた。そこには葉鶏頭が赤々と匂つてゐた。そしてその垣根の向うから、看護婦が唄つてゐるらしいソプラノの流行唄が物憂くひどいて、彼に焦ら立たしい感じをおこさせた。びつたりと灼きついてゐるルビーのことを思ふと、

『ルビー。』

と小い百合子が、謎のやうに呟いたことを彼は想ひ出した。彼女おれはそれを知つてたのかも知れない、考へると疑はしいことが、たんとある、さうだ、彼女が隠したのかも知れない……彼は、そんなことを考へた。

八

彼はふと眼を移して障子の際におかれた平常着を見た。そして、その上の洗つてくれたらしい古ハンケチの上に、鄭重に寶のやうにおかれてある紐のついた毯を見た。

『あけて、あけて。』

彼が、その百合子の聲を聞きながら、その發作のために駆け出したとき、なんの氣もなく袂に入
れておいたそれだつた。

『あ。』

彼の心に閃くやうに來たものがあつた。彼は急に手を伸して、それを取り上げるまじつと見つめ
た。

『なんですか。』

芙美子が不思議さうにそれを見た。彼は胸の底に込み上げて來るもどかしさと、やるせなさに眼
が舞ふやうな氣がした。

『芙美子さん。』

彼は唇を慄はせた。

『これです、きつとこれです。』

『え。』

『これは彼女がすつみ前、奥さんに預けといたものなんです。大切なものだつて。彼女は死ぬ前に
これを僕にくれると言ひましたよ。彼女が隠しといたのです。この中にきつとルビーを……さうで
す。きつとさうです。』

『あゝ。』

芙美子は怯えたやうに聲を上げると、彼の傍にすり寄つた。彦一はその紐を切らうと焦つたが丈
夫な麻絲は手では切れなかつた。彼はまた、それに齒をあてゝ喰切らうとしたが、それをまた芙美
子が止めた。

『まあ、いけませんわ。』

それが彦一の手から離れてころがつたのを、彼女が拾ひ上げて彼に渡した。

そこへ勝山と光子が笑ひながら這入つて來て、驚きの聲を上げた。

『なあに、大谷さん。』

『どうしたんだい。』

『これだ、鉄だ。』

『え。』

『この中にルビーがあるんだ。鉄だ。』

彦一は狂したやうに叫んで、頬を引きつらせると笑ひ出した。うれしさと悲しさが爆發したやう
に、彼は涙さへ流してゐた。

『すぐ……』

光子があわて、駈け出して行つた。

しばらくして黙つてそこに坐り込んだ勝山が、彼からそれを受取つて呟いた。

「ほんとにあるかしら。」

「あるつもりだ。」

「でもなかつたら……」

三人は顔を見合せた。空虚なものが彦一の心を通りすぎたが、彼はすぐ確信を以て叫んだ。

「大丈夫だ。きつとある。」

光子はあわてたので鉄が見つからなくて、父の寢室から剃刀を探し出して来て、それを彦一にあたへた。

「いゝんですか。」

「かまやあしないわよ。父さんだつて怒るもんですか。」

「あつたよ、光子。」

そこへ夫人が駈けつけた。そして女中までが、そのあとを慌しく走つて来た。

「奥様、こちらですよ。」

「まあ。」

夫人が自分の手を見て笑ひ出した。女中から鉄を受取らないで、物指を奪つて走つて来たらしかつた。彦一も、それを見ると涙ぐんだまま笑ひ出しながら、鉄を受取つて毬を開きにかゝつた。それは縦横十文字に一つづゝ結へられて、固く包んであつた。

「早くしなさいよ。」

光子が急かせて身體を揺つた。

「あ！」

彦一は鉄の先で指を傷けた。

「血！」

芙美子が我を忘れてその手に取りつくと、ちゆつとその指を吸つた。

「まあ。」

彼女は自分であきれて、その指に紙を巻いてみた。その間に勝山が毬を受取つて、その紐を一つづゝ切つては解きほごした。

「よこしなさいよ。」

光子がそれを奪はうとした。

「いゝよ、いゝよ。」

勝山は、それを渡さなかつた。

『あなたはおそいわよ。』

『まあ。』

夫人がそれを見て、胸をかゝへて涙ぐましくほろろんだ。

『あちらの御夫婦は仲がよいのに、こちらでは喧嘩……見つともないわねえ。』

『まあ、母さん。』

若い四人が言ひ合せたやうに顔を赧らめてしまった。今度は彦一がまた勝山から毬を受取つた。紐がほぐれると、その下は紙が幾重にも巻いてあつた。それからまた細い木綿糸が幾重にも巻きつけられてゐた。彦一がそれをたぐると、毬は畳の上で踊つた。

『随分嚴重にしてあるんだね。』

『百合子がしたんですよ。自分の愛を守るために……可哀想な百合子！』

勝山が言つたのに夫人がやさしく答へた。

木綿糸はどこまでも長くつゞいて彦一の手からむのを、芙美子がびたりと膝をよせ合つたまゝ、一々切り取つては圓めてゐた。

『長いわねえ。』

光子の言葉が夫人が受けて囁いた。

『愛のもつれがほぐれるんですよ。』

『まあ。』

芙美子は氣がついてゐるさつたが、その頬はうれしさに輝いてゐた。

『萬歳！』

それがほぐれ切ると光子が叫んだ。確かにそれであるとわかつたからだつた。が、しかし、その聲は涙ぐんでゐた。彦一は重ねて包んである薄い紙、それに見おほえがあつた。芙美子が手づからそれに包んだもので、ルビーはその中に透かされてゐた。彼は慄へる手にそれを取り上げると、おづおづとそれを開いた。

『あゝ。』

そこに燦然として、それが光つてゐた。戀も怨みも妬みも罩められてゐるその珠、それがそこに輝き出したのだつた。彼は誰もおし黙つて涙ぐんでゐるのを感じて、自分もまた悲しさとうれしさに慄へると、やるせなく不覺な涙に咽んでしまつた。

稜を六面に磨いて、方五分に充たないその珠、それにも人生の一局を左右する力が秘んでゐた。そして、そのために苦み悩み、悶えて来た一年……それが、そのルビーの輝きの中に映つてゐた。その中には美しい人の滅びて行く面影、その松野幸江の哀れな姿もあつた。小い百合子の心もあつた。そして、その父の涙ぐましい一生も恐らくそこにあるやうに、そして愛慾に狂つた自分の姿も、そこに映つてゐるやうに、彦一はちつとそれを見つめた。

誰も黙々として、それを眺めてゐた。

『あゝ。』

勝山が太い息を吐いた。

『こんなところに幸福が隠れてゐたんだねえ。』

『よかつたわ、大勝利だわ。』

さう言つて寂しくほゝゑんだのは夫人であつた。その心に、いろいろの想出が歸つてゐるやうに彦一には思はれた。

光子は勝山に寄り添つて、美しい瞳を見開いてゐた。

『あゝ。』

芙美子は灼きつくやうにそれに見入りながら、しつかりと彦一の肩に縋つて、その肘をきつと胸

に抱きしめてゐた。その膝の慄へてゐるのが彦一に感ぜられた。ふと芙美子が叫んだ。

『あら、なにか書いてありますわ。』

包み紙の端に鉛筆で、幼い型の狂つた字が一行認められてゐるのを、彦一はその紙をめくつて讀んだ。

『ルビ、あのひとのもの、なくなれ。』

またなくなつては大變だ、と彦一は心に思ひながら、その百合子の字に見入つた。少女の心に深く感ぜられてゐた戀心が、泌み入るやうに悲しく彼の胸の底にひびいて來た。

『可哀想な百合子！』

彼は心に呟いて、うなだれてしまつた。芙美子の涙がはらはらと、彼の膝に落ちて來た。

彦一は、百合子がそれを隠したことに就いて、自分がどう考へねばならぬかを、また思ひ耽つた。勿論彼は百合子を許してはゐるが、彼女がそれを隠してしまつてゐたことは、快いことではなかつた。少くともそれに就いては、もし彼女が生きてゐるとすれば責めらるべきであるやうに思はれた。彼はそれを自分の心の中で尋ね、また答へた。

——なぜ、彼女は責めらるべきであるか。

——隠したから、それによつて自分は正しい愛に迷ふやうになつてしまつたのだ。

— けれど彼女は愛してゐた。愛してゐたから妬んだのだ。
— それがわるいと思ふ。

— どうしてわるいのだ。愛することが、さうして責めらるべきなのだ。

— 愛することはいゝが、妬んで隠したことがいけないと思ふ。

— 愛することは所有することだ。彼女はその路を進んだにすぎないのだ。

『あゝ。』

彦一はそこまで考へると、自分が功利的であつたことをしみじみ感じた。たとひ妹として愛したにしても、自分の愛の力が彼女を満足させてゐなかつたことが考へられた。……人間はどんなに愛したつて、そこに求める者に満足はない。自分もやつぱり、広く人間を愛する力に缺けてゐた。正しく人生を愛する力に缺けてゐた。彼女は死を以て自分を看護したけれど、自分は自分の屈託にのみ没頭した。そこに彼女に足りないものがあつて、これを隠させたのだ……彼はその結論に達して自分の胸が、和かく涙ぐましく燃えて來ることを感じた。

眼を上げると、それが勝山のうるんだ眼と出會つた。

『おい、これをどうする。』

勝山がすぐたづねた。

『さあ。』

彦一は芙美子を見返つて、そのルビーを下においた。芙美子が涙ぐんだ瞳を上げて勝山に答へた。
『やつぱりなほして頂きますわ。』

『そして……』

勝山に夫人が答へながら芙美子を見た。

『私がそれを持つてお宅に伺ひませう。そしてお母さんを説きつけて上げますわ。ねえ、芙美子さん、私達を誤解しないでね。そして……』

夫人は彦一を見つめた。

『あなたもさうしたら、高松さんに行かなくてはいけないわ。……誰もわるいのではない、ルビーがこんな毬の中に隠れてたのがわるいとするのね。芙美子さんのお母さんだつて、それで氣がなほつてしまへば、あなたにだつて親切な母さんだわ。あの方だつて、あなたの劇の出た雑誌……「新興」の九月號を、そつと私に借りに來たりしたんですもの。ねえ、いつも雑誌なんて讀んだことがない方がよ。』

— 芙美子さんがお持ちですのに、つて言つたら、

— 彼女のは借りにくゝてなんて、言つていらつしやつたくらるのですから大丈夫ですわ。それに

お父さんは、大谷さんのお父さんと小さい時の知合だといふし、みんな好都合なんですからねえ。』
『お願いします。どうぞ。』

勝山が、その友のために言葉を添へた。

彦一は、すべてのことが夫人の力で動いて行く気がする、やはりたのもしく思はないではゐられなかつた。そこに彼と夫人との間に黒く泌みついた誤解があるとしても、それは忘れられ拭はれてゐた……そして、そこには朗かな母の心が残つてゐる。彼はさう信じなければならぬことを感じた。それは人生に於ける倫理の命題ではなくて、新しい感情の示してゐる道であつた。

『あるがまゝに進め。』

彼はそれを心に呟いて、自分の新しく人生に進んで行く道が、そこに創られ、始められて行くことをはつきり感じた。

『今までのことは棄石だ。これから人生が始まるのだ。前途は暗いがそこに光を見つけて行かう。愛するといふことは明るいことだけではない。暗いものだ。苦しいものだ。寂しいものだ。それが人生の道なのだ。それをあるがまゝに受け入れて伸びよ。さうだ、伸びよ、伸びよ、新しく伸びよ。』

十二月になつてからのことであつた。夜の八時過ぎの急行に間に合せるために急いで来た二臺の自動車は東京驛に着いた。さうしてその中から二組の新夫婦らしい人達と、それを見送る六七人の人達が出た。

顔の淺黒い頬の瘦せた新しい夫らしい一人が、老いた父のトランクを持つた傍に寄つて行つた。

『父さん、僕がそれを持ちますよ。』

『いゝよ、彦一……』

その父はうれしさうに眼を輝かせて答へた。

『お婿さんがこんなものを持つちやあだいなしだ。』

『すみませんねえ。』

『かまやあしないさ……うん、それからお前達が歸るまでには私達も代々木の新しい家に移つてゐるから、歸るのはあつちだよ。いゝかい。』

『えゝ、大丈夫ですよ、子供ぢやありませんもの。』

『ほい、また叱られたな。』

『父さん……僕は例の原稿を仕上げるので、殊によるミ歸りが二日三日延びるか知れませんが、御心配なく……』

『あゝ、いゝよ。けれどなるべく早く歸つて来てくれ。婆さんと女中と三人ぢや寂しいからな。』

『えゝ。』
プラットフォームに這入ると、その中の二組だけがあわてゝ二等車に乗り込んだ。それから見送りの人達と挨拶を交した。

美しい夫人が窓によつて言つた。

『光子、ぢやあ行つておいで。』

洋装の美しいその若い夫人が窓口に凭つたまゝ頬を赧らめて、その母を見つめた。

『なんだか變な氣がするわね。』

『まあ、この娘は。』

美しい夫人は、漸く走り出した汽車に傍つて二三歩あるきながら、聲を上げて笑つたが、その顔にはどこか寂しい影があつた。

『行つてまゐります。』

その夫も手を舉げて叫んだ。

それらは彦一と芙美子、勝山と光子、その新しい結婚の蜜ハネムシ月の旅立なのであつた。

汽車が驛をすつと離れると、彼等は二人づゝ凭り添つて互に眼を見交した。そして互に誰からも知れず、賑かに笑ひ出してしまつた。

『昨夜ゆふべ面白い人に逢つてね。』

彦一が勝山に言つた。

『え、誰にさ。』

『岩原さん。僕の劇を上演する相談で、あの人に呼ばれたんだ。』

『え、上演するの……どこで。』

光子がたづねた。

『日本劇場、正月の番組になるんです。』

『まあ、よかつたわねえ。』

しかし、それを聞いてよろこばしさに眉を染めてほつと吐息をしたのは、芙美子であつた。彦一は、ちらつゝそれを見やつた。

『岩原つて面白い人さ。事務所を訪ねたら、こゝちやあ話が出来ませんからつて、すぐに料理屋に

案内されちやつてね。それでどんな用かと思へば、たゞ承諾書に捺印して小切手を受取るだけのことさ。

『上演料つてどのくらゐのもんだね。』

『五つだつた。それで、こんどの旅行も親爺に厄介かけずに済みさうだ。だが話つていふのは、それちやあないんだ。少し困るが、松野さんの事だよ。』

『ほう、それを岩原さんに聞いたんだね。』

『あゝ。』

彦一はちらつと芙美子を見た。

『つまり、彼女の^{おのひと}ことでも相談をかけられたんだ。僕のを上演するのに、彼女を舞臺に呼び戻して女主人公にしたいといふんだ。彼女は映画の方も評判いゝさうだけど、やつぱり舞臺の人で、あのくらゐの人を、そのまゝにしてしまふのは惜しいといふのさ。』

『それで身體の方はどんならしいね。』

『いゝらしい話だ。』

『それで……君は承諾したのかい。』

『承諾するもしないもないからね。よろしいやうにつてお願いして来た。まあ、彼女なら僕のみた

いな新しいものでも十分やりこなせると思つたしね。それにそれが彼女の新しい道を拓けば僕にとつては……』

『罪ほろほしになるといふのかい。』

『まあ、さうだね。』

『少し勝手すぎるが……人生といふものは、どうにもならないことが多いのだ。それだけのことで、ねえ、芙美子さん。』

勝山は光子ミなにかを語つてゐた芙美子の方を向いた。

『それだけでも、君達にまつて、多少でも暗さが消えたといふものだ。』

芙美子は恥ぢらつたやうに頬を赧らめたが、すぐ光子と、また話をつづけた。

勝山はそれを見やつて、聲をひそめて彦一に囁いた。

『それからね。高見もね。』

『え。』

『あれも結婚したさうだよ。』

『いつだい。』

『十日許り前のことだつたらしい。光子さんの母さん……僕にもこんど母さんだが、それへ通知が

「昨日だか来たんだ。」

「人生つて面白いねえ。さうして一つづつ、みんな新しく自分の道を進むのさ。」
光子がそれを聞いて笑つた。

「まあ。」

「なんです、光子さん。」

彦一に光子が、また輝かしく笑つて答へた。

「自分の道ではないわ。これから二人の道だわ。ねえ、芙美子さん。」

芙美子は笑つて答へなかつた。彦一はそれを美しいと思つた。そのつゞましい笑ひの中には彦一に對する信頼が、いづばいに籠つてゐた。

一一

汽車が國府津に近くなつてから、彦一と芙美子は降りる支度を始めた。彼等はそこに一泊してから、冬枯になつた寂しい箱根の温泉をめぐるつもりであつた。彦一は仕事を持つて来たので、それをするためには遠くへ行くことが出来なかつた。

「君達はあしたは奈良だね。」

「あゝ。」

勝山がほゝゑんで彦一に答へた。

「歸りには一緒になれるかね。」

「とにかく奈良屋ホテルだね。そこへ四五日の中に電報を打つよ。」

「さうしてくれたまへ。そして歸りは箱根に一泊するさ。」

「あゝ、なるべくさうするよ。」

汽車が國府津に着いてから彼等はまた別れの挨拶を窓口で交した。

「こゝまで送つて来てくれたやうなもんだね。」

勝山はさう言つたが、彦一も笑つて答へた。

「いや、僕等も送られて来たやうな氣がするから、お互さまだ。」

笑つてゐる中に汽車は出發した。さうしてそこに彦一と芙美子が残された。結婚！ 恐らくその後を感じるであらう輝きは、その瞬間に二人に來たやうに感ぜられた。

彦一は脊が高く、痩せてはるたが、どこか肉のしまつた、そのくせ柔かい感じを抱かせる肉附を持つてゐた。色の淺黒い、そして眼だけがはつきり輝いて、唇の赤いのが、まごか魅惑するやう

に女性を惹きつけるところがあつた。黒い冬外套に身を包んで、天鵝絨の帽子を冠つてゐる彼の様子は、どこか陰鬱に見えてゐた。芙美子は、その新しい夫に凭り縋るやうにして驛を出て行つた。その夜濤の音を聞きながら二人は、その宿屋の離れ座敷で向き合つてゐた。星の夜を海から来る風は鳴つてゐるが、それも、その濇い部屋までは忍び込んで来なかつた。そして二人の手は、いつか重つて、互に心を嘯き交してゐるやうに黙り合つて、ほゝゑんでゐたのであつた。

彦一は、それから靜に彼女を呼んだ。

『芙美子さん。』

『はい。』

『いよく、新しい日が來ましたねえ。』

『……』

芙美子の俯いた頸は白かつた。彦一は靜にその手に力を罩めたが、かすかにそれは歸つて來た。

『僕は……』

彦一は顔を赧らめた。

『僕は童貞ぢやあないんです。それを許してください。』

『え。そんなこともういゝわ。』

芙美子が消え入りでもしたいやうに、それを止めたけど、彦一は止めなかつた。

『いゝえ、聴いてください。僕はやつぱりそれを聴いて貰つて、はつきり許して貰ふのです。今日

……それから明日、私達の生活は、これからつゞいて行くのです。私はあなたにわかつて貰ふ。そしてあなたは私に……一點の曇りでもそこにあるものを取り去つて、過去を忘れて、先に進まなければならぬのです。』

『えゝ、わかりましたわ。』

芙美子がほの白い顔を上げた。

『私は形式から言へば再婚者ですもの。私こそ、あなたにお詫びしなくては……』

二人はおし黙つて顔を見合せた。それから彦一はポケットを探るに、二通の手紙を取り出した。

それは彼女から送られた、愛の誓ひと處女の誓ひの手紙なのであつた。

彼は言つた。

『僕はこれを持つて來ました。』

『あ。』

芙美子は頬を染めて、かすかにその髪ををのゝかせた。

『ねえ、これが僕達の愛の聖書です。僕は二人でこれを読みたい。そしてこれによつて淨化された

心になつて、この一夜を送りませう。』
『ええ。』

二人はそれを見るために頬をすり寄せた。彼女の後毛うしろげが彦一の頬をなぶつてゐた。彼はそこに女性の、それも心から愛する人の肌の匂ひを嗅いだ。衝動！ 彼は胸が爽かな鼓動をうち始めるのを聞いた。

彦一が読み始めると、急に彼女がすゝり泣いてしまつた。彼はやさしくその肩を抱いた。
『泣きませう。互に泣きませう。過去を葬るために泣きませう。』

彦一は自分も涙をたゝへながら、それを少しづつ読みつゞけた。愛する者の呼吸が、そこに力よく迫つて来た。そしてそれは、恐らく人生に於ける新しい出發の涙でなければならなかつた。けに新生よ。

こゝに創られたるものはよきかな……あゝ、それはほめらるべきで、愛の忍苦をつんで来た涙であり、嘆きであつた。

夜は更けて、そこに二人のすゝり泣く聲は高かつたが、濤と風がそれを消してゐた。そして星々は、その時しのびかにほのかな光を空の上に漂はせて、こゝに新しい愛の創生があることを祝福するかのやうであつた。

彦一は漸くのこととて、その手紙を読み終つた。

『芙美子さん。』

『はい。』

『辛かつた、今までは辛かつた。』

はじめてそこに彦一の心の叫びがひびいて来た。二つの手は固く握りしめられ、四つの瞳は互に見つめあつた。

『ねえ、これからだつて苦しいかも知れない。悲しいこと、寂しいこと、それが互にあるでせう。けれど、それが人生だ。私達は、そこにこれから出て行くのだ。互に手を取つて行くのだ。もう、私も泣かない。そして、あなたも泣くのは止めるのです。そして……』

彦一は胸が迫るのをおしつけた。そして芙美子の手に熱い唇をあたへた。

『そして私がおなたに言はなければならぬことは、私達がこれから感情ばかりでなしに、思想として一しよに生きたい。……いゝですか、私は、この一年の間に、人生といふものがどの位暗いものなのかを見たのです。そこに私の思想がある……私は、やっぱり新しい人生を欲してゐる。さうしてそこに行くがためには、この暗黒をして私達の心に輝かしめることだと思ふのです。それはニヒリストとして行くことではない——正しい人生の戦士として、少なくとも同志として、現代のイー

ジーンな物質文明の頽廢と戦つて行きたいと思ふのです……ねえ、結婚は私達の光明かも知れない。しかしこの光明がどこから来たか。

——私達はまちがつてる光と戦ひませう。

そして私達はこの上、長く長く暗黒に生きる事によつて、大衆と共にまちがつた人生をたゞきつぶさねばならない。わかりますか、私はあなたと共に、その暗い旗印に生きたいと思ふのです。』

『はい、わかりますわ、私。』

『そしてそのために私達は少なくとも、或はいまの生活をすてなくてはならないかも知れない。でも、この人生を苦しんで、最後の正しいよろこびを求めて行きませう。』

『はい、よろこびを、よろこびを……』

恍惚とした芙美子は彼の方に崩れ掛るやうになつてそれを呟いた。

彦一は、そこに創生のためにつゞいて来た長い陰慘な道に、そこに別れ去つた人達、そしてまたその道を越えて正しく巢立つた自分達を見た。それは切ないほどに彼の胸を騒がせてゐたが、しかし美しい力とよろこびの誕生が、その一面に呼びひゞき聞えてゐた。それら悲しい日々を越え、死を越え、悩みを越え、あらゆる苦しみを越えての成長こそ、そこに暗い人生を正しく行く思想を得たのだ……彼は更に進んで行く人生に向つて手をさし伸べるやうに彼女に向つて、その腕を伸して

いづつかりと彼女の胸を抱いた。そこによろこびを越え、悲しみを越えての暗黒の法悦が新しく彼等を待つてゐた。

光よ、いつかたより來りてわれを泣かしむるや……人間は光明と希望とに生きるばかりではない。それらを越えて深い人生の悲慘と苦惱とに、その身を投げ出すことにも、伸びようとする正しい意志があるのだ。それが暗黒をうしろにした大きな光であると、どうして言へないであらうか。

彦一はそこに、微妙にして高き創生の情熱をつかんだ。

彼は暗い啓示を感じたのだ。

生きよ、伸びよ、輝けよ！ 彼は自らが暗黒そのものを光として、新しい世紀に向つて廣く大きく翼をうちふるはすこゝを、その胸の中を感じた。そしてそれら自由の行手を眺めるかのやうに、燃える眼を暗い人生の彼方に馳せてゐた。——かくして彼等のすゝみ行く道が、苦惱の人生として大きく擴がつてゐるこゝを知らねばならぬ。

それは盡くるなき戦ひである。

さうしてそこにこそ、暗黒の大洋がひゞかす波の音のやうに、人生につきすゝむ進軍のドラムがある。……暗い意志を以て、彼等はその調べに、足音高く踏み合はせ、流れ行く時代の大河と共に遙にとほい世紀の行手を、かぎりなき苦惱のよろこびを以てめざしてゐた。

跋・「光の翼」のあとに

この作は「主婦の友」に一年連載したものを改作したもの、私は病中をとほして、そのために長く努力したが、部分的にすてがたいところが多くて、全部に手を入れることを敢てすることが出来なかつた。

たゞ私として言へば、新しいロマンチズムの詩情と思想を生かしたことを、少しの誇としたい。

長篇小説のスタイルとしても、私はこれを獨自なものとなして來た。或は長篇の散文詩と呼ぶにふさはしいかも知れない程であるとしても、私としてはそのための努力を、決して無駄にしたのではない確信がある。……自分のもの、少なくとも私はさう呼べるべきものにまでしなければ、これを一冊として發表したくなかつたのである。……たゞ漸くかうして完成して見ると、まだ決してその心持がとほつてゐないことが、思ひ返へされて來る。が、私はそれを忍ばなければならぬ。

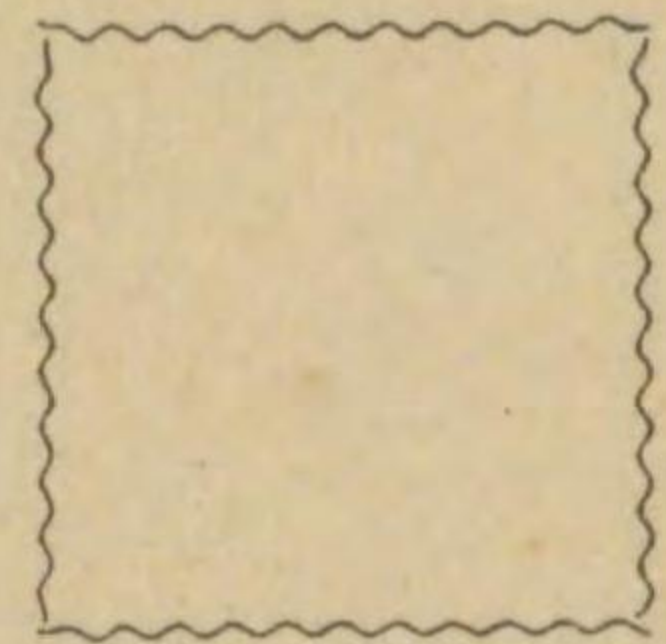
刊行會にこの稿をわたす日は、既に一月を過ぎてしまつてゐるからである。——完全なふものはどこにもない、讀者はそれを諒としてくれるであらうと思ふ。……私はそのうちに全五卷の長篇

「全人の記録」の出る時を待つて、自分の正しい長篇の行き方を示さうと思つてゐる。

昭和三年三月六日夜

著 者

昭和三年五月廿五日印
昭和三年五月廿八日發行



發行所

東京市京橋區桶町三番地

福田正夫詩集刊行會

振替貯金東京七七五八九番

【定價金壹圓五拾錢】

著者 福田正夫

編輯兼發行者 田口國三

印刷者 東京市京橋區桶町三番地 餘

印刷所 東京市京橋區桶町三番地 耕文堂印刷所 電話京橋二三七八番

東京市

東京市京橋區藤田三番地

藤田五次郎兼町會



昭和三年五月廿八日
藤田三平氏
謹啓

香井	藤田	田	田	田	田
香井	藤田	田	田	田	田
香井	藤田	田	田	田	田
香井	藤田	田	田	田	田

【家訓金言圖書】

58

6

58

6

58
66

582
66

